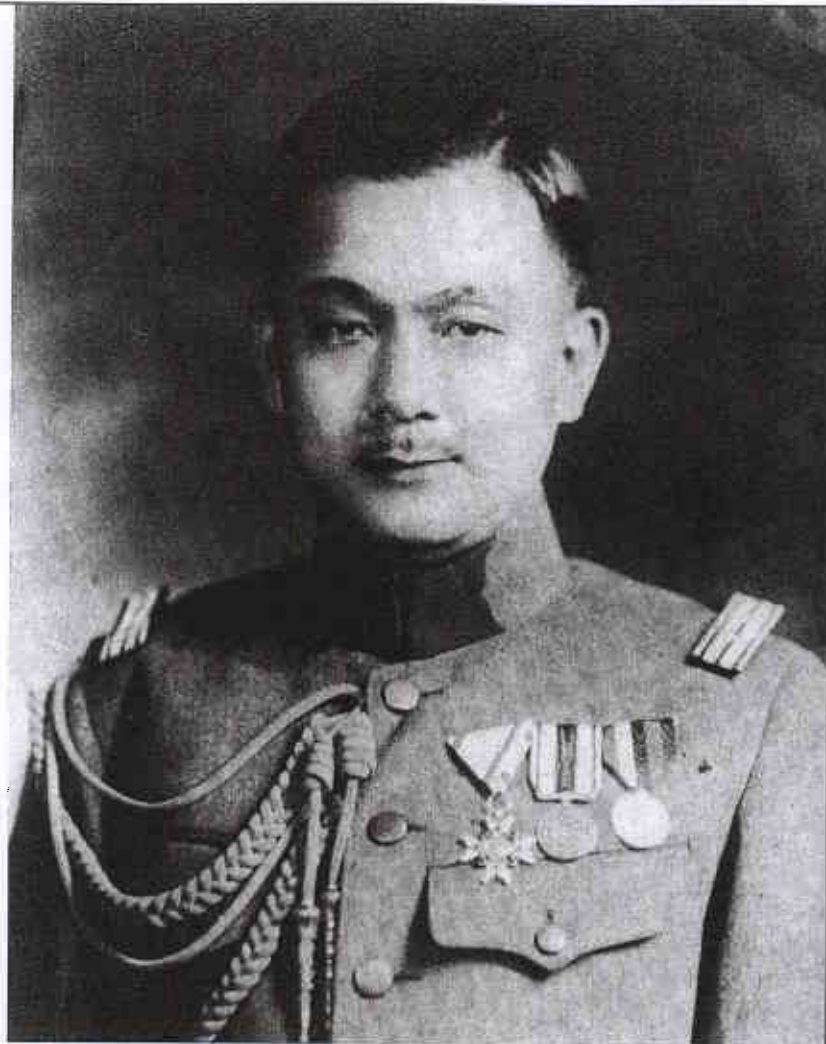


全国に名をはせた郷土の軍人たち



しなのき書房
長野千曲の太平洋戦争
写真記録
太平洋戦争終戦60年記念出版

▶陸軍中将(戦死後大将に昇進)栗林忠道。長野市松代町西条の出身。長野中学校(現長野高校)では学校始まって以来の逸材とうたわれ、陸士から陸大を卒業、成績優秀により恩賜の軍刀を拝受し以後エリートコースを歩んだ。硫黄島で壮烈なる戦死をとげた。

太平洋戦争中、南海最前線において、また最高統帥本部の大本営において、圧倒的優勢な米軍相手に身を挺して勇猛果敢に闘った長野市出身の指揮官たちがいた。

長野市松代町西条出身の将軍栗林忠道は、それまでの米軍の太平洋諸島の戦術を研究し、水際撃破作戦によらず、上陸後叩く防衛戦略を構築して、これを一貫して守らせた。この戦術により、昭和二十年(一九四五)二月十五日に硫黄島に上陸した圧倒的優勢な火力を持つ数倍の米軍を相手にして最後まで勇戦敢闘し、全員一致火の玉となって頑強に抵抗、戦闘は文字通り熾烈を極め、米軍をして終始震撼せしめた。あくまで洞穴にたてこもって敵を引きつけてから叩く作戦のため米軍の損失は甚大で、その数二万四千有余。米軍が攻勢に出て以来、その損失が日本軍のそれを上まわった唯一の、戦史に輝く戦闘であった。米軍司令官スミス中将をして「統帥の鬼、偉大なる将軍栗林。かかる智将と巡り合い、戦闘を交えることのできたのは、一生の名誉というべきなり。」と言わしめた。

部下とともに最後まで勇敢に戦った栗林将軍は、大本営あてに悲愴なる訣別の電報を発し、総攻撃の陣頭に立ち、壮烈果敢、言語に絶した戦闘の最期をとり、沖繩とともに太平洋戦争最後の戦闘を飾ったのである。

国の為重きつとめを果し得て
矢弾尽き果て散るぞ悲しき

長野市松代町馬場町出身の富岡定俊少将は、日本海軍の高級参謀として、太平洋戦争の開戦時には大佐で軍令部第一課長(作戦)、また終戦時には第一線のラバウル参謀長から迎えられて少将で軍令部第一部長(作戦)を務め、いずれも日本海軍の作戦の責任を負う中枢の重要ポストで活躍した。

敗戦直後の昭和二十年(一九四五)九月二日、ミズーリ号艦上の降伏文書調印式には日本海軍代表として参列し、歴史的な降伏文書調印という、戦争終結の重要な使命を果たしている。

〈高木 寛〉

▶栗林大将の書。開戦3年目の昭和18年の元旦、硫黄島着任前に書いたもの。栗林大将は文才や画才にもすぐれ、また尺八の名人でもあった。戦争中一世を風靡した軍歌「愛馬進軍歌」の作詞者とも言われている。責任感強く、清節を重んじた将軍であった。(長野市・昭和18年)



▶硫黄島の死守を命じられ、硫黄島で武人としての最後を全うした栗林大将は、松代西条の生家近くの、高坂弾正の墓や蛙合戦で名高い曹洞宗の古刹龍潭山妙徳寺の墓地に葬られている。享年54歳の働きざかりであった。戒名は國應院殿忠譽自浄大居士。(長野市)



◀9月2日、米戦艦ミズーリ号艦上の降伏文書調印式。戦闘はすでに終結済みで、降伏は既定の事実。調印式は進行中の事態に対する追認となった。署名するのが日本側全権重光外相。後方最前列向かって左が全権海津参謀総長、その後が海軍代表で長野市松代町出身の作戦部長富岡定俊少将。(昭和20年)



◀開戦直前の昭和16年12月、海軍軍令部作戦室に集まった第一課員(作戦課)。前列左から富岡定俊第一課長(大佐・44歳)、高松宮参謀、福留第一部長(少将)、神先任参謀(中佐)(昭和16年)



▶東京都青山墓地の富岡家墓地に眠る富岡定俊海軍少将。松代町出身の富岡家は4代にわたった海軍家系で定俊の父定恭も海軍中将。日本海軍最後の作戦部長富岡定俊は、昭和45年12月7日、横浜市港北区日吉本町の自宅で73歳の波乱多い生涯を閉じている。